

第1研究課題 第1A分科会

「教育課程に関する課題」

研究主題 「特色ある学校づくりに向けた教頭の役割」

一ふるさとへの愛着と誇りを持ち、社会の一員としての自覚を持った
児童生徒の育成を目指して一

黒潮町立佐賀小学校 岡本幸定

1 研究の概要

黒潮町では、教育行政方針の中で、「ふるさと・キャリア教育」の推進を掲げ、「ふるさとの歴史や文化に対する誇り」を持ち、「地域の課題に対する当事者意識」を育てることを目指して教育活動を展開している。各学校でも、それぞれの地域の特性を生かし、様々な関わり合いを仕組み、地域とつながることを通して、ふるさとへの思いやコミュニティの一員としての自覚を持った児童生徒の育成を目指している。

各学校では、それぞれの地域の実情に合わせ、各教科の学習や総合的な学習、学校行事において地域の文化や人、また課題などを学んでいる。佐賀小学校は、佐賀中学校とともに、令和2・3年度の2年間にわたり、「中山間地域における特色ある学校づくり推進事業」の指定を受け、生活科・総合的な学習の時間を中心にして、小中の連携のもと、児童・生徒の育成に取り組んできた。

黒潮町教頭会では、各校の実践を持ち寄り、教頭としての役割や関わりについて研究を進めた。各校での実践と佐賀小中の取り組みを提起し、成果と課題をまとめ、報告する。

2 研究の内容

| 実践内容 | 教頭としての関わり |
|---|--|
| (1) 地域に愛着と誇りを持つ児童生徒 ア ふるさとキャリア教育の推進 イ コミュニティスクールの立ち上げ ウ 地域の課題である防災教育の推進 | <ul style="list-style-type: none">○ 地域の方との準備会の実施○ 各校の実態を踏まえた教育課程の編成○ 「町防災教育プログラム」の活用 防災担当との連携 |
| (2) 実態に合わせた取組 ア 「まるごと教育祭」小中高の連携した実践 イ 「上川口マルシェ」地域と児童をつなぐ | <ul style="list-style-type: none">○ 小中高の連絡調整 校種間をこえた計画と実施○ 地域と学校をつなぐ計画 地域へのアプローチ |
| (3) 中山間地域の特色を生かした取組 ア 小中の連携 (ア) 小中共通の学校教育目標を設定 「人間を大事に」 (イ) 「生活科・総合的な学習の時間」9 年間のカリキュラムの作成及び実践 (ウ) 小中合同行事 イ 保小連携(スタートプログラムなど) ウ 地域の方が学校に関わる取組づくり | <ul style="list-style-type: none">○ 小中連携推進委員会での企画・進捗管理○ 系統的・効果的な授業づくりの研究体制 の確立○ 小中合同行事での効果的な実践の検証○ 保小連携の実践を引き継ぎ・積み重ね○ 地域コーディネーターを活用して、学校 ボランティアの輪をつくる。 |

3 教頭としての今後の課題

- (1) 「総合的な学習の時間」の授業改善を進め、児童一人一人が町の課題を「わがこと」として捉える意識をどう持たせるのか、の研究を深める。
- (2) 児童・生徒が探求する総合的な学習の時間の授業を進め、探求的なスキルをどう他の教科にいかすか、の実践を重ねる。
- (3) 研究の成果をどう次年度に引き継いでいくか。(文書への記録、職員会・校内研への提起)
- (4) コミュニティスクールとしての活動をいかすため、地域にどう関わっていくか。

1 はじめに

黒潮町は、高知県西部に位置する人口1万人弱の海に面した町である。他のほとんどの地域と同じように人口減、取り分け若年層の減少が課題の地域である。

このような中、黒潮町では、教育行政方針の中で、「ふるさと・キャリア教育」の推進を掲げ、「ふるさとの歴史や文化に対する誇り」を持ち、「地域の課題に対する当事者意識」を育てることを目指して教育活動を展開している。

各学校でも、それぞれの地域の実情・特性を生かし、様々な関わり合いを仕組み、地域とつながることを通して、ふるさとへの思いやコミュニティの一員としての自覚を持った児童生徒の育成を目指している。地域とつながり、地域を学び、地域を考えることが、ふるさとへの愛着や地域の一員としての自覚を育てることにつながると考えている。今年度は、町内全ての学校をコミュニティスクールとして立ち上げた。その活性化は、教頭としての役割の大きな一つである。

佐賀小学校では、佐賀中学校とともに、令和2・3年度の2年間にわたり、「中山間地域における特色ある学校づくり推進事業」の指定を受け、生活科・総合的な学習の時間を中心にして、小中の連携のもと、児童・生徒の育成に取り組んできた。

黒潮町教頭会では、各校の実践を交流し合い、教頭としての役割や関わりについて研究を進めた。各校での実践と佐賀小・中の取組を提起し、成果と課題をまとめ、報告する。

2 研究の内容

学校によって、地域には様々な実情があり、取り組んできた内容も違う。各校が総合的な学習の時間や特別活動、学校行事など様々な場面で、「ふるさと・キャリア教育」に取り組んでいる。各校とも、自分の住んでいる地域、ふるさとを好きになり、誇りを持って生きていってほしい、という思いは同じである。

どんな活動を仕組み、地域に関心を持ち、愛着を持つようになるのか。地域のコミュニティの一員として自覚を持ち、地域のことを考えるためにはどんな教育課程の工夫が必要なのか明確にする必要がある。

各校の取組を深め、ひいては黒潮町全体の取組を高めていくために、教頭の果たす役割は大きい。教職員に対しての関わり方、校内研究の方向性を明確にすること、具体的な行事の企画等、研究、協議を進めている。

また、黒潮町には、人権教育、防災教育（南海トラフ地震対策）という大きな課題がある。それを推進しつつ、その中で黒潮町教頭部会研究テーマ「ふるさと・キャリア教育を軸とした学校改善及び家庭・地域との連携に向けた教頭の役割の研究」に迫らなければならない。

以下、主な学校の実践について提起する。

(1) 各校の実態に合わせた取組

ア 安全教育の研究指定を基に（南郷小）

中学校区の学校が連携し、防災教育・安全教育の取組を共有している。教頭は地域・保護者、学校間の取組を調整し、課題を明らかにして提起し、取組を進めた。

イ 子どもと地域が一体となって盛り上げる「上川口マルシェ」（上川口小）

総合学習の取組として、5・6年生を中心に自分で作ったものを販売したり、地域のものを売ったり、イベントを作り上げた。子どもたちが企画し、地域の方にも出店や協力を呼び掛けた。その中で地域の人たちとつながり、地域を盛り上げようという気持ちを強くしていった。

教頭は、担任と兼務ということで、児童と直接話し合い、児童に意欲を持たせながら企画を共に考え、学校と地域の調整役として取り組んだ。児童と直接関わり実践することなど負担はあったが、全教職員、地域の方、保護者などの理解と協力を得ることができ、児童も達成感を持って終えることができた。

ウ 保小中高の連携を意識して（入野小）



保育所から高校までが近い距離にあることを生かし、子どもたちの関わり合いを大切に
して連携を進めた。保小中高合同避難訓練、中学校家庭科での「保育園児とあそぼう」の



学習、高校文化祭への保育所、小・中学生の参加など、様々な場で
交流を深めた。また、PTA子どもサポート部をつくり、保護者の
方にも学校の活動に関わってもらっている。

教頭は、企画、提案、連絡・調整等具体的な実施に向けての推進
役となって取り組んだ。11月には、「黒潮町まるごと教育祭」とし
て、保育所、小学校、中学校、高等学校が一堂に会して、研究発表
が行われた。各校の教頭間で連携し実施できた。子どもたちだけでなく、職員、保護者、
地域の方もよりつながりを意識できたのではないかと考える。実施後も、取組がイベント
消化に終わらないよう、教頭が、各職員に対して本来の意義の確認や提起を行い、取組を
続けている。

(2) 「中山間地域における特色ある学校づくり」9年間を通して、子どもを育てる (佐賀小・佐賀中学校)

佐賀小・中学校では、小中の連携を進め、小中9年間を通した一貫した教育を目指し
ている。一昨年度に、学校教育目標を「人間を大事に」と同じ目標にし、取組をスター
トさせた。

ア 研究組織

推進の組織として、「小・中連携全体会議：全職員参加」「小・中連携推進委員会
：連携担当、小中管理職」「小・中研究推進委員会：小・中研究主任、小・中生活・
総合担当、小・中連携担当」の3つを位置付けた。教頭は、月2回行われる小・中連
携推進委員会に属し、生活・総合学習の進捗状況の確認、合同校内研修・合同行事の
計画、授業改善に向けての共通の取組の確認などを行っている。

イ 生活・総合的な学習の時間の取組

生活・総合的な学習の進め方が、まず、大きな課題となった。9年間を見通し、ス
テージを3つに分けた。小1～4までをステージ1、
小5～中1までをステージ2、中2～3をステージ3
とした。ステージ1では、主に自分たちのまち、佐賀
の良さを知る事为目标にした。ステージ2・3はそれ
ぞれ佐賀の課題に気付くこと、佐賀をより良くする方
法を考えることとした。全てのステージにおいて、探
究した内容を広げるために分かりやすく説明する方法
を身に付けたり、他者との協働する態度を養ったりすることを重点に置いている。



それぞれに目指す資質・能力を設定し、ステージごとに進捗状況を確認していった。
それぞれのステージの最終学年では、そのステージの目指す資質・能力が定着してい
るかを検討する。それぞれの学年では、そのステージのゴールを理解して学習を進め
ている。

課題は、児童一人ひとりが、探究課題を「わがこと」として捉え、主体的に取り組
んでいるかということだった。年度当初は、指導者側が、児童の自主性を重視するこ
との捉え違いをしており、児童の意見だけで進み、学習が迷走した。研修、協議を重
ね、教師が方向性を持って取り組み、仕掛けをしていくことを学んだ。教頭は、推進
委員会や小・中連携会議の中でそのことを提起し、担任と確認して
いった。児童が主体性を持ちながら、価値のあるゴールを目指すよ
うに仕組み、手立てを打っていくことを提起している。



また、小・中での共通認識の難しさも課題の一つである。授業の
スタイル、研究の組織や意識が小・中では違い、一方で課題と感じ
ることを一方では感じていなかったり、小中で取り決めた基本的な
授業の約束事が微妙にずれていたりすることがあった。連携推進委
員会や研究推進委員会で提起し、協議し合い、ずれの修正を試みている。その時に、

教頭間での意思疎通を大切にして、小・中の教頭間で話し合いを持ち、それぞれの学校や合同会の中で提起をしていった。

ウ 小中の連携を目指して

つながりを強めるため、小・中合同行事や中学校教員による小学生への出前授業、



小・中間での授業参観等を進めている。合同行事としては、防災・安全に向けて、不審者避難訓練、津波災害避難訓練、防災炊き出し訓練を計画した。避難訓練は、実際に災害が起きれば、児童・生徒が共に避難することになるので、合同での配慮や工夫は必要になってくる。中学生が小学生を助けながら避難をしたり、小学生も自分の

できることを考えたり、防災だけではなく、それぞれの自主性や協働性を育むことにもつながると考えている。合同で行うことは、ただ同じ時間に行うだけといった簡単なものではなく、時間設定など小中の違いを考慮した計画が必要であり、調整役として教頭間での協議が重要になってくる。何度もそれぞれの学校を行き交いながら協議し、実施に向けて取り組んでいる。また、小中それぞれの防災担当の協議も促し、担当同士もつながりを持って、防災の取組を考えるようになってきた。

エ 保小の連携を目指して

佐賀小は、昨年度保・小接続の研究指定も受けており、佐賀保育所と連携しスタートカリキュラムを作成し取組を進めた。教頭は、調整と取りまとめを行い、保小の交流活動や連絡会などに取り組んできた。保育所との交流、連携の中で園児を知り、また、1年生の姿を見てもらって、児童への対応の協議をする中で、保・小を一つの教育活動と捉えることができている。生活科の学習では、保育所での活動を事前に知ること、より発展的な活動が仕組み、取組の向上につながっている。

今年度は研究指定を終えているが、担任が変わっても研究した成果をきちんとつなげられるよう、保小連携の会を計画し、定期的に話し合いを持っている。その中で、1年生の児童が成長を自覚し自信が持てるような、また、園児が小学校にあこがれや安心感を持ち、園での活動に意欲を持って取り組めるような、互惠性のある交流活動を仕組んでいる。教頭として、研究の成果をしっかりとつなげられるよう、提起し共に取り組んでいる。

オ 地域とともに学校を考える

昨年度より佐賀小・中学校がコミュニティスクールとして位置付けられ（黒潮町内全ての学校がコミュニティスクールとなっている。）、小・中で一つの学校運営協議会を設置している。立ち上げまで、管理職、教育委員会で何度か話し合いを持ち、組織づくり等準備を行った。児童数が減少している現在、「地域で子どもの姿を見ることが少ない。子どものことは分からない。」という地域の委員さんの声があり、児童・生徒が地域へ出て行く機会や地域の行事を盛り上げられないかと協議している。地域の方にボランティアを募り、学校へ来てもらう取組は、一定の成果を得ている。今後の協議の充実につながることを期待している。

3 研究の成果と課題

地域への関わりを全校が進めてきた中で、コロナ禍の中でも地域とのつながりを保てている。教頭会の中で実践交流を行い、自校の取組の向上に生かすことができたことや悩みや課題を共有し、解決へ向けて協議することができたことは成果といえる。

一方、各校の研究の成果を広げ、次年度へ引き継いでいくことが大切である。また、児童・生徒一人ひとりに課題意識を持たせ、主体的な活動を仕組んでいくことが共通の研究課題となる。主体的な活動を各教科へと広げれば、学力向上へのアプローチになると考える。また、町内全てがコミュニティスクールとなったことで、コミュニティスクールの機能をどう高めていくかということも共通課題としたい。